大学生の“世間”の範囲と援助行動意図

清水　裕

目　的

“世間の常識”や“世間の目”など、わが国においては、複数の人々を指す語として、“社会”や“集団”とともに“世間”が使われてきた。また、政治的な文脈を中心に使われている“世論”という言葉の意味も、国語辞典によれば“世間一般の意見”（三省堂、1957）とされている。“世間”という言葉が多用されてきたにもかかわらず、社会心理学の領域において、これまで“世間”に関する社会心理学的研究は、ほとんど行われてこなかった。そのような中で、“世間”の構造について考察している井上（1977）は、“世間”が厳密な意味では“集団”ではないが、「個人（行為主体）のがわからみれば、わが国の人びとに特有な、一種の「準拠集団」」であり、「「準拠集団」の考え方を適用することによって、「世間」の構造の特質が、たぶん、くっきりと浮きぼりにされることであろう。」としている。そして、我々をとりまく人的環境を、Ⅰミウチ・ナカマウチ、Ⅱ①せまいセケン、②ひろいセケン、Ⅲタニン・ヨソノヒトと大きく3つの領域からなると論じている。また、羞恥心と世間との関連について検討している菅原（2005）は、“親密な他者”と“見知らぬ他者”に感じる羞恥の程度は低いが、“中間的な親密さの他者”に感じる羞恥は高く、“親密な他者”は井上（1977）の“ミウチ・ナカマウチ”に、“見知らぬ他者”は“タニン・ヨソノヒト”に、“中間的な親密さの他者”は“セケン”にそれぞれ対応するとしている。さらに、羞恥に関する研究から、地域社会が“セケン”としての機能を失いつつあり、“タニン”の世界へと移行しつつあるようだと指摘している。

“社会”に関しては、阿部（1995）が、「世間を社会と同じものだと考えている人もいるらしい。しかし、世間は社会とは違う。明治以降世間という言葉は文章の中からは徐々に消えていったが、会話の中では今でもしばしば使われ、諺の形ではきわめて使用頻度が高い。他方で社会という言葉は明治以降徐々に文章の中

で使われはじめ、学者やジャーナリスト、教師などはこの言葉を使うが、その意味は西欧の歴史的背景の中で生み出されたかなり抽象的なものであり、世間がもっているような具体性を欠いている。」と論じている。そして、西欧では個人の意思に基づいてその社会のあり方が決まってくると理解されているが、日本では世間が個人の意思によってつくられ、そのあり方も決まるとは考えられておらず、世間は所与とみなされているとしている。このような阿部の視点のほかに、中村（2011）は、“社会”と“世間”の機能的関係として、情報処理過程に注目し、国際問題や政治・経済問題など、いわゆる“社会的情報”も“世間的情報”へと処理されて初めて「個人」の生活に直接的に影響するようになる場合が多いのではないかとし、「「社会」は、人々の生活全般を中に飲み込み、個々人の基本的生活の影響が小さくはないのですが、間接的で具体性に欠けているのです。しかし、その形態的内容は各種組織体や様々な法令・規約など、極めて具体的に把握されます。他方「世間」は社会生活の中で生起する極めて具体的な内容を伴って作用します。しかし、その形態的内容は全く把握困難なのです。」と指摘している。

先行研究によれば、“世間”が大きく3つの領域からなると指摘されているが、それらの各領域に具体的に誰が含まれるのかについては、明らかにされていない。この理由として、“世間”の範囲の認識に関しては個人差が大きいうえ、各領域に含まれる人物が状況によっても変化するため、3領域の区分が重要なのであり、それらに含まれる具体的な人物を特定することは重要な意味を持たないと考えられてきたためと推測される。しかし、菅原（2005）の指摘のように、地域社会が“セケン”から“タニン”の領域へ変化しているとすれば、居住地域周辺住民は“セケン”の中でも“タニン”寄りに位置しているか、すでに“タニン”に含まれていると考えられる。また、“社会”に関しては、中村（2011）により形態的内容の把握が困難と指摘されているように、具体的に含まれる人々に基づく分類に関しては、明らかではない。“世間”と“社会”が異なると認識されているのであれば、そこに含まれる人々に基づく構造が異なるものとして認識されているはずである。

また、“ミウチ”、“セケン”、“タニン”の3領域の人々が援助を必要としている場合、近親者である“ミウチ”が最も援助されやすく、関係性の弱い“タニン”が最も援助されにくいと予測される。

本研究では、まず研究1において、大学生による“世間”の認識に関して、井上（1977）が考察している3領域の1つに分類できるのかを検討するとともに、具体的にどのような人物が“世間”に含まれると認識されているのかを明らかに

する。つぎに研究2においては、“ミウチ”と“セケン”の間の援助行動意図の差異に関して検討する。

研究1　大学生の“世間”の範囲

研究1の目的は、大学生が認識している“世間”の構造を明らかにすることである。

方　法

調査対象者：首都圏の大学生281人（男子130人、女子151人）、平均年齢：20.0歳

調査方法：質問紙調査を2010年11月の心理学の授業中に集団実施した。

条件：調査対象者を“世間”、“世間は厳しい”、“世間の声”、“世間ではスマートフォンが流行している”、“世間体が悪い”、“世間の常識”、“親切な人に助けられ、まだまだ世間は捨てたものではない”、“世間に顔向けできない”、“世間の目を気にする”の9条件うちのいずれか1つに割り当て、それぞれの場合の世間に該当する者を下記の30の選択肢の中から全て選択させた。

また、“世間”と対応させ、“社会”に関しても“社会”、“社会は厳しい”、“社会の声”、“社会ではスマートフォンが流行している”、“社会への体面が悪い”、“社会の常識”、“親切な人に助けられ、まだまだ社会は捨てたものではない”、“社会に顔向けできない”、“社会の目を気にする”の9条件のうちのいずれか1つに割り当て、それぞれの場合の社会に該当する者を下記の30の選択肢の中から全て選択させた。なお、9条件にはそれぞれ30〜32名が割り当てられた。なお，“世間”と“社会”の条件は級内要因である。

選択肢：“親”、“友人”、“友人の家族”、“兄弟姉妹”、“祖父母”、“親戚”、“親の勤務先の人”、“アルバイト先の同僚”、“アルバイト先の上司”、“マスコミ”、“知り合い”、“自分”、“親の友人・知人”、“兄弟姉妹の友人・知人”、“祖父母の友人・知人”、“親戚の人の友人・知人”、“近所にいる親しい人”、“近所にいる顔見知りの人”、“近所にいる見知らぬ人”、“今の学校の先生”、“過去に習った学校の先生”、“同じ学校に通っている見知らぬ人”、“ネット上でのみ会話をする会ったことがない人”、“ネットの掲示板に書き込む見知らぬ人”、“今は会わない昔の友人”、“今は会わない昔の知人”、“外国にいる友人・知人”、“電車に乗り合わせた見知らぬ人”、“外国にいる見知らぬ人”、“会ったことのない見

知らぬ人”の30種類である。

結果と考察

本研究においては、上記の条件のうち、“世間”および“社会”条件に割り当てられた32人（男子13人、女子19人、平均年齢20.2歳）の結果を分析した。

“世間”に含まれる割合と“社会”に含まれる割合

30種類の人物が“世間”と“社会”に含まれる割合を単純集計したところ、図1のようになった。“世間”に最も高い割合で該当したのは“マスコミ”であり、“親戚の人の友人・知人”や“親の勤務先の人”など、直接知らない人や顔見知り程度の知人が上位に挙げられていた。また、未知の人や知人でも、外国にいる人は該当しない傾向があるほか、家族は該当しない傾向にあった。

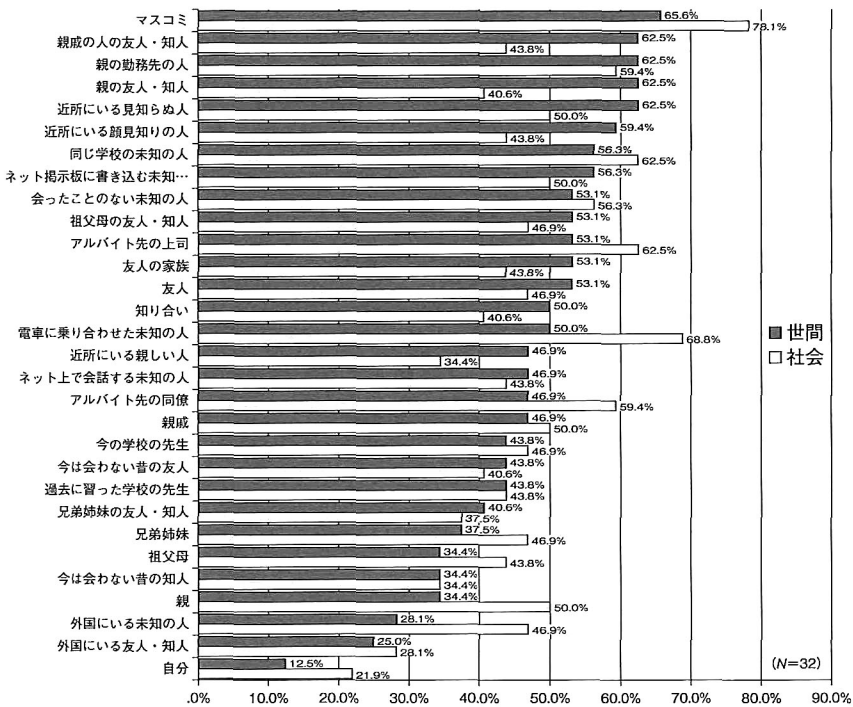

図1 “世間”の該当者と“社会”の該当者の割合（*N*=32）

他方、“社会”に最も高い割合で該当したのも“マスコミ”であった。以下、“電車に乗り合わせた未知の人”、“同じ学校の未知の人”、“アルバイト先の上司”、“親の勤務先の人”、“アルバイト先の同僚”が続き、未知の人や親しくない人が上位に位置しているが、“世間”と比べて“親戚”・“親”・“兄弟姉妹”・“祖父母”など親しい人たちの該当率も高めであった。

総じて、“未知の人”の“社会”への該当率が“世間”への該当率よりも高くなっていることから、“社会”の場合には、未知の人であっても該当する点が“世間”の該当者とは異なると解釈できる。

“世間”と“社会”に含まれる人の構造

“世間”と“社会”に含まれる人に関して、それぞれ林の数量化理論第Ⅲ類により構造を分析した。“世間”に含まれる人に関するカテゴリウエイトは表1の

表1 “世間”に関する数量化Ⅲ類カテゴリウエイト

人物	X軸	Y軸	Z軸
友人	1.91	−.58	−.83
親	2.69	−1.62	−.51
親戚	1.55	−1.20	.23
マスコミ	−.71	−2.08	−.02
兄弟姉妹	2.56	−1.02	−.27
友人の家族	.59	−.36	.72
ネット上未知の人	−1.04	−1.78	.78
近所の未知の人	−1.62	−1.01	.04
親の友人・知人	.20	.20	.16
近所の顔見知りの人	−.37	.75	1.75
親の勤務先の人	−.16	.96	−1.04
アルバイト先上司	.25	1.03	.72
過去の学校の先生	.00	.99	.74
アルバイト先同僚	.32	1.04	1.02
親戚の友人・知人	.01	.68	.00
ネット会話する未知の人	−.94	−.33	.80
今は会わない昔の友人	.34	1.79	−1.38
電車の未知の人	−.97	.10	−.30
外国の未知の人	−.57	.24	−3.47
兄弟姉妹の友人・知人	−.09	.63	.41
近所の親しい人	−.27	.41	2.04
学校の未知の人	−.69	.10	−1.50
外国の友人・知人	−.12	.61	.41
祖父母の友人・知人	.36	.04	−.01
今の学校の先生	−.11	1.31	−.22
未知の人	−1.64	−1.07	−1.32
知り合い	.04	−.26	.53
自分	.90	.03	1.12
今は会わない昔の友人	−.38	1.50	−.94
祖父母	.81	.32	−.59
固有値	.20	.14	.11
寄与率	19.15%	13.06%	10.21%
累積寄与率	19.15%	32.21%	42.41%

とおりであり、X軸とZ軸に関するプロット結果は、図2のようになった。図2からは、家族・親戚・友人からなる“ミウチ”、家族や親戚の友人・知人のほか、近所の親しい人や知人、アルバイト先の同僚、今は会わない友人・知人、同じ学校の人、マスコミからなる“セケン”、繋がりのない未知の人からなる“タニン”の3つの部分に分かれると解釈できる。したがって、“世間”に関しては、井上(1977)と対応する構造を確認できた。

ただし、“セケン”のカテゴリを詳細に見ていくと、“近所の親しい人”と“近

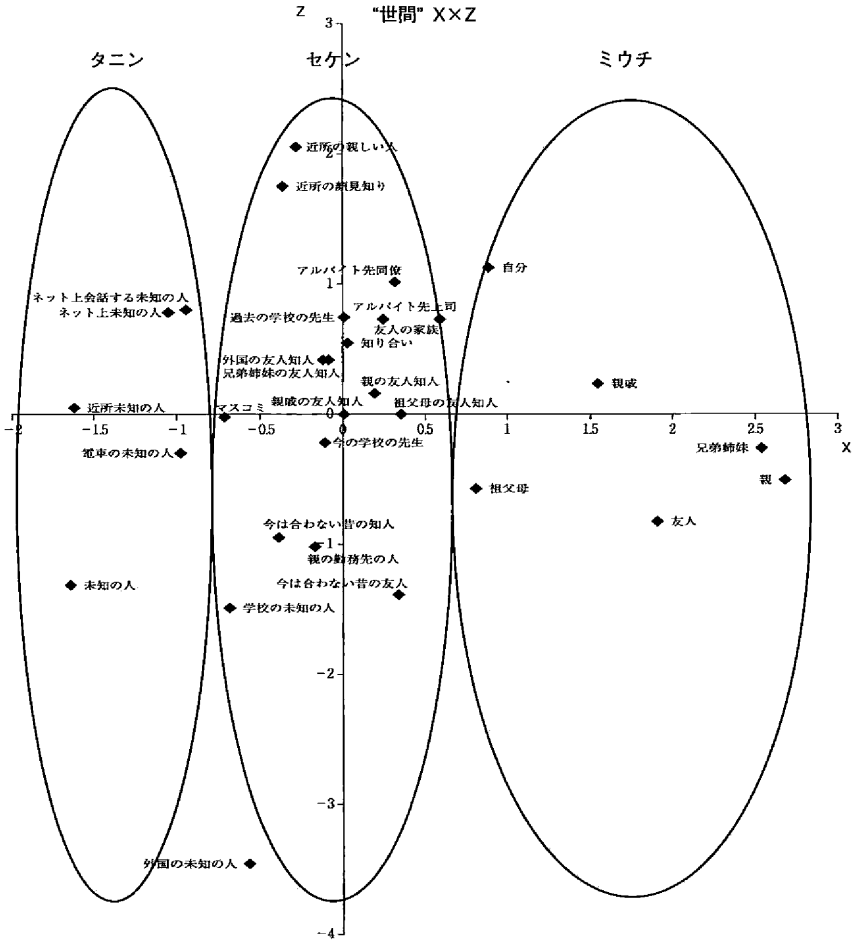

図2 “世間”の範囲に関する数量化Ⅲ類プロット

所の顔見知り”からなる“近所の顔を会わせる人”と解釈できる下位カテゴリと、“今は会わない昔の友人”、“今は会わない昔の知人”、“親の勤務先の人”と“学校の未知の人”からなる、“現在、直接対面しない人”と解釈できる下位カテゴリと、“直接会う可能性のある親密ではない人”と解釈できる下位カテゴリが存在していると考えられる。また、“マスコミ”は“セケン”に含まれてはいるが、“タニン”に近い位置に認識されているといえよう。

“社会”に含まれる人に関するカテゴリウエイトは表2のとおりであり、X軸とZ軸に関するプロットは、図3のようになった。図3からは、家族や直接・間接的な知人からなる“直接・間接的に知っている人”のカテゴリと会ったことのない“知り合いではない人”のカテゴリに二分され、図2の“セケン”に該当

表2 “社会”に関する数量化Ⅲ類カテゴリウエイト

人物	X軸	Y軸	Z軸
友人	1.11	−.54	.52
親	1.27	.37	1.80
親戚	1.16	−.22	1.02
マスコミ	−1.73	.90	2.29
兄弟姉妹	1.31	.29	1.48
友人の家族	.90	.15	.32
ネット上の未知の人	−1.35	−1.73	1.49
近所の未知の人	−1.12	.16	.40
親の友人・知人	.68	−.63	−.25
近所の顔見知りの人	.57	−.91	−.87
親の勤務先の人	.16	1.51	−1.13
アルバイト先上司	.05	1.92	.31
過去の学校の先生	.39	−.43	−.98
アルバイト先の先輩	.12	2.33	−.43
親戚の友人・知人	.85	−.18	.44
ネットで会話する未知の人	−.69	−1.56	−.22
今は会わない昔の友人	.42	−1.60	−.56
電車の未知の人	−1.26	−.09	−.56
外国の未知の人	−.60	.75	−1.10
兄弟姉妹の友人・知人	.35	−.51	−.52
近所の親しい人	.69	−.81	−.56
学校の未知の人	−1.36	.32	−1.13
外国の友人・知人	.52	−.65	−.18
祖父母の友人・知人	.50	.05	−1.39
今の学校の先生	.42	.11	.08
未知の人	−2.10	−.99	−.67
知り合い	.78	−.71	−.20
自分	1.22	−.48	−.36
今は会わない昔の友人	.44	−1.14	−.81
祖父母	.48	.57	−.98
固有値	.22	.12	.10
寄与率	22.59%	12.58%	10.45%
累積寄与率	22.59%	35.18%	45.63%

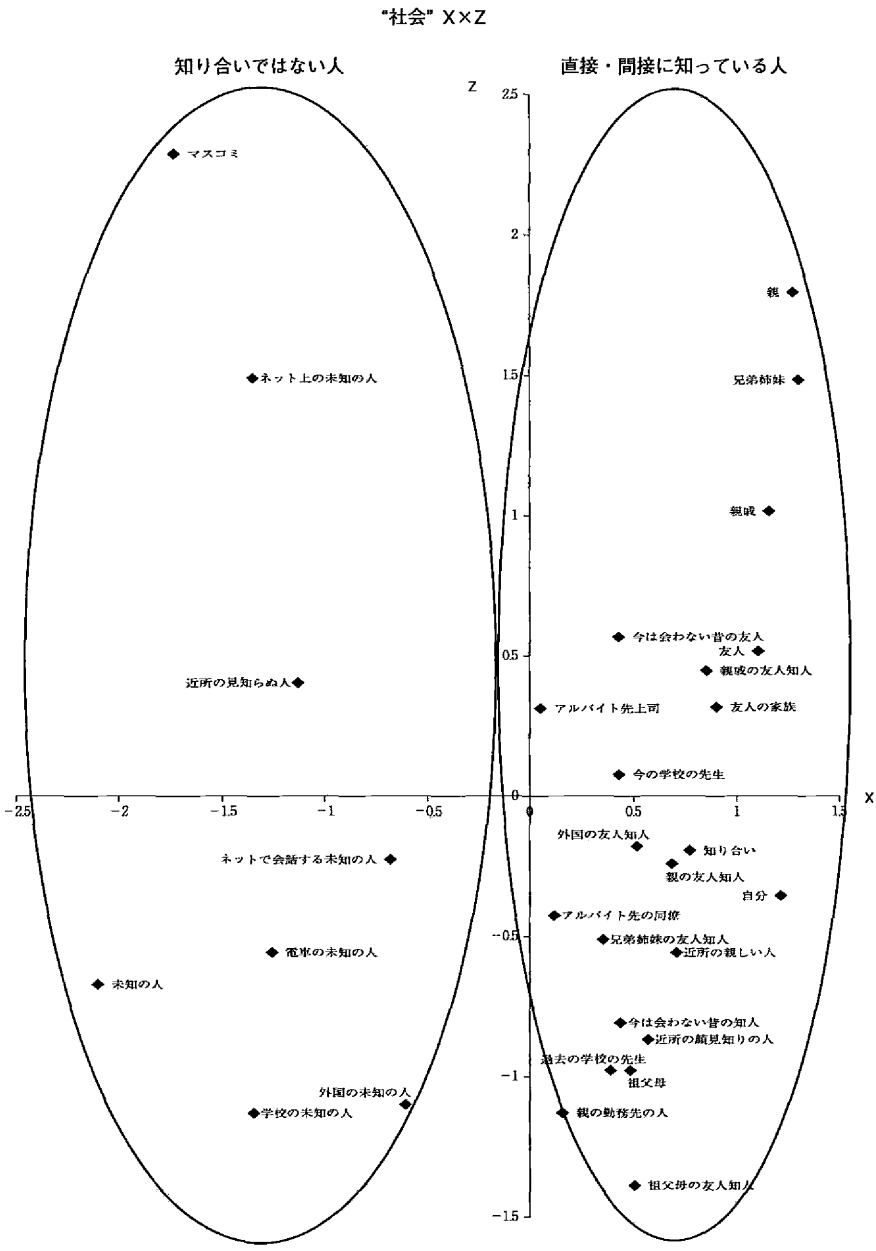

図3 "社会"の範囲に関する数量化Ⅲ類プロット

する人々は、“直接・間接的に知っている人”の中にほぼ含まれていると解釈できる。大学生は、“世間”と“社会”が異なるものであると認識しており、“世間”の方が“社会”よりも構造を複雑なものと認識していると解釈できる。図1と図2の“セケン”には含まれる人物に違いがみられる。例えば、“近所の未知の人”は、図1では“セケン”の上位に位置するが、図2では“タニン”に含まれている。つまり、人によってどの人物と同じカテゴリと考えるかに差異が大きいため、このようなずれが生じていると考えられる。菅原（2005）の指摘のように、“セケン”と“タニン”の微妙な位置にいる人物と考えることもできよう。このように、どの人物が“セケン”に含まれると考えるかの個人差が大きいため図2では図1の位置とはずれたカテゴリに含まれる人物が存在すると考えられる。

研究2　援助対象者（困窮者）の世間を基準にした位置と援助しやすさとの関連性

研究2の目的は、援助行動意図を援助対象者（困窮者）の“世間”の中での位置づけとの関係から明らかにすることである。

方　法

調査対象者：首都圏の大学生263名（男子97名、女子166名）、平均年齢：20.0歳

調査方法：質問紙調査を2010年12月の心理学の授業中に集団実施した。

調査項目：周囲に多くの他の人がいる4つの状況での23種類の援助対象者（困窮者）への援助行動意図を“全く行わないと思う”：1点から”必ず行うと思う”：7点までの7件法で尋ねた。

設定状況：”対象者が持ち物を落としてばらまいた時、一緒に拾うか”（小さな親切　労力・コスト小）、“対象者が倒れるところが見えた時、近寄って様子を確認するか”（緊急事態）、“対象者が小銭が無く、バスに乗れずに困っている様子の時、近寄って小銭を渡すか”（寄付・分与）、“対象者が周囲に引っ越しの手伝いをお願いしている時、時間があれば手伝うか”（労力・コスト大）の4状況を設定した。

援助対象者（困窮者）：“友人の家族”、“近所にいる見知らぬ人”、“親の友人・知人”、“祖父母”、“知り合い”、“久しぶりに会った昔の知人”、“親”、“親の勤務

先の人"、"アルバイト先の上司"、"兄弟姉妹の友人・知人"、"今の学校の先生"、"親戚"、"近所にいる顔見知りの人"、"過去に習った学校の先生"、"アルバイト先の同僚"、"親戚の人の友人・知人"、"会ったことのない見知らぬ人"、"兄弟姉妹"、"久しぶりに会った昔の友人"、"近所にいる親しい人"、"同じ学校に通っている見知らぬ人"、"祖父母の友人・知人"、"友人" の23種類を設定した。

結果と考察

世間に含まれる程度（図1）により、援助対象者（困窮者）を便宜的に4群に分け、援助行動意図を比較した。なお、4群の分類は、以下のように行った。

A群は、"世間" に含まれるとする割合が60%以上の "近所にいる見知らぬ人"、"親の友人・知人"、"親の勤務先の人" と "親戚の人の友人・知人" からなる。

B群は、"世間" に含まれるとする割合が50%台の "友人"、"友人の家族"、"近所にいる顔見知りの人"、"アルバイト先の上司"、"同じ学校に通っている見知らぬ人"、"祖父母の友人・知人"、"会ったことのない見知らぬ人" と "知り合い" からなる。

C群は、"世間" に含まれるとする割合が40%台の "親戚"、"過去に習った学校の先生"、"アルバイト先の同僚"、"久しぶりに会った昔の友人"、"兄弟姉妹の友人・知人"、"近所にいる親しい人" と "今の学校の先生" からなる。

D群は、"世間" に含まれる割合が40%未満の "親"、"兄弟姉妹"、"久しぶりに会った昔の知人" と "祖父母" からなる。

AからDまでの4群いずれも、行動意図の項目合計得点から項目平均値を算出し、設定状況ごとに行動意図を比較した。設定状況ごとの各群の平均値は、表3から表6のとおりである。

いずれの設定状況に関しても、援助行動意図は、A群で最も低く、D群で最も高かった。また、各群間には全て有意水準0.1%以下で有意な主効果が認められた。この結果からは、"ミウチ" と考えられるD群は、最も援助される可能性が高いと解釈できる。それに対して "セケン" と考えられるA群は、最も援助される可能性が低いと解釈できる。ただし、落とし物を拾う行動意図と倒れた人の様子を確認する行動意図に関しては、A群の平均値が中点の4点を越えていたが、小銭を渡す行動の意図と引っ越しを手伝う行動の意図に関しては、A群は中点以下であった。身内の人への援助行動意図は4つの状況間で差はなく、平

表3　落とし物を拾う援助の行動意図　N=245

条件	M	SD	
A群「世間」に含まれる割合60%以上	4.7	1.48	***
B群「世間」に含まれる割合50%台	5.1	1.10	***
C群「世間」に含まれる割合40%台	5.6	1.10	***
D群「世間」に含まれる割合40%未満	6.1	.86	

***：p<.001

表4　倒れた人の様子を確認する行動意図　N=249

条件	M	SD	
A群「世間」に含まれる割合60%以上	5.3	1.42	***
B群「世間」に含まれる割合50%台	5.6	1.08	***
C群「世間」に含まれる割合40%台	6.1	.89	***
D群「世間」に含まれる割合40%未満	6.6	.66	

***：p<.001

表5　小銭を渡す行動意図　N=243

条件	M	SD	
A群「世間」に含まれる割合60%以上	3.5	1.60	***
B群「世間」に含まれる割合50%台	4.1	1.27	***
C群「世間」に含まれる割合40%台	4.9	1.36	***
D群「世間」に含まれる割合40%未満	6.1	.93	

***：p<.001

表6　引っ越しを手伝う行動意図　N=242

条件	M	SD	
A群「世間」に含まれる割合60%以上	3.0	1.51	***
B群「世間」に含まれる割合50%台	3.6	1.19	***
C群「世間」に含まれる割合40%台	4.2	1.40	***
D群「世間」に含まれる割合40%未満	5.8	.93	

***：p<.001

均値はいずれも中点以上であったが、世間の人への援助行動意図は、“小さな親切”と“緊急事態での援助”では中点以上であったが、“寄付・分与”と“労力のかかる援助”に関しては中点以下であった。つまり、直接的に知らない世間の人には援助コストのかからない援助や命に関わる可能性のある緊急事態での援助

は行おうと考えているが、金銭や大きな援助コストのかかる援助は行いたくないと考えているものと解釈できる。間接的な知人であるため、最低限の援助はしようと意図しているものと考えられる。

本研究では対象者を“セケン”に該当する程度で尋ねたため、“セケン”とそれ以外のカテゴリに分け、“タニン”を分離して検討することができなかった。今後の課題としては、“ミウチ”と“セケン”と“タニン”を明確に分けて検討する必要がある。

引用文献

阿部謹也　1995　「世間」とは何か　講談社
井上忠司　1977　「世間体」の構造　社会心理史への試み　日本放送出版協会
中村陽吉　2011　世間心理学ことはじめ　東京大学出版会
三省堂編修所　1957　新小辞林第三版
菅原健介　2005　羞恥心はどこへ消えた　光文社新書